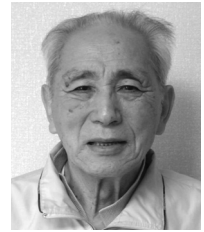


飛鳥田一雄さんとともに 歩んだ社会党

——船橋成幸氏に聞く（上）



はじめに一入党の経緯

最初に簡単に自己紹介をさせていただきます。私は1925年12月の生まれで、もうすぐ87歳になります。昨日、加藤宣幸さん、矢野凱也さんの米寿の祝をやりました。これは明治大学の施設（紫紺館4F）でやったのですが、2年遅れの後輩でございます。

簡単に略歴を申しますと、ちょうど20歳のときに終戦になりましたので、神戸の高等商船学校に行っていましたが、入校して3カ月ぐらいで病気になり、終戦間際まで1年近く休学して山口県の病院に入院していました。入院中、徳山大空襲のときに被災した友人を案じて戦火の中、屍の重なる中を走り回ったことが、戦争の最も忘れられない記憶です。

戦後は父母や妹が旧満州にいたので、生活のため船乗りになり、家族が引き揚げてからも通算して5年ぐらい船員生活を続けました。商船学校を卒業していませんから海技免状もないのですが、乙種という免状を取って、後に小さな船の船長をやったりしました。

その前に第二復員省（旧海軍省）が復員兵を大陸から日本へ連れてくる。その船（旧海防艦「三宅」）の航海士見習いとして、まだ国民党の軍隊が上海を抑えているときに、上海郊外の飯田栈橋、これは日本の陸軍が造った栈橋ですが、そこから博多湾の西戸崎まで戦争に負けた兵隊さんを積んで帰る。そういうことをやったり、下関海峡で掃海作業をやったり、あるいは海技免状を取って瀬戸内海、九州を中心に100トンとか150トンの小さな機帆船の船長をやったりしていました。

1949年8月、私は日産近海機船という会社の船で航海士を勤めていましたが、たまたまその会社で100人ぐらいの大量解雇が通告され、商船学校出身の船員仲間数人と相談して解雇反対闘争を組織することになりました。まだ右も左もわからなかったのですが、想定外の争議になって会社側がうろたえたこともあり、とりあえず解雇通知を撤回させることができました。当時は労働運動の全国的な高揚期で、私たちの勝利はそういう時代背景の中での一つの成功体

船橋成幸氏は、1925年、植民地時代の朝鮮平安北道生まれ。日本社会党の機関誌『月刊社会党』編集長、労働局副部長、組織局長などを歴任。その後、横浜市参与を経て党本部に復帰、飛鳥田委員長指名中執、政審事務局長、企画調査局長、1988年、党本部を退任。

この研究会は、2012年9月30日（日）午後2時～5時、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階「中の2」会議室において開催された。出席者は、雨宮昭一、五十嵐仁、岡田一郎、中根康裕、浜谷惇、細川正、栢田大知彦、木下真志であった。事前に船橋氏宛に質問状を送付し、それにこたえていただく証言（今号）と、質疑応答に分け、読者の便宜上、中見出しを付した（木下真志）。

験だったと思います。

それに味を占めて、私は他の船会社の労働争議にも首を突っ込むようになり、1～2年後には海上労働運動の舞台でいっばしの活動家とみなされ、1951年の4月からは全日本海員組合の岡山県玉野支部で専従者になりました。これを2年半ぐらいやりましたが、私はそのうち、非合法化された共産党が糸を引いていた海上統一委員会という地下組織に加わり、政令325号違反（占領目的阻害）の容疑ということで、官憲からも組合の中央からも睨まれていたものですから、限界を感じて上京、総評事務局局長の高野実（1901～74）さんを頼って、いろいろ労働運動のことを教わりました。当時、総評が平和経済計画会議をやっている、そこで船員代表ということでスピーチをさせてもらったこともありました。

私が海員組合の専従者をやっている間に、ちょうど第2回の参議院選挙（1950年6月）がありまして、そのときに全国区からは労働者農民党（労農党）の木村禧八郎、岡山地方区からは太田敏兄の両候補が立ち、その応援のために中原健次代議士が自転車で県内を遊説する活動に参加しました。そして、中原さんが労農党の書記長だったものですから、その勧めで入党することになりました。そこから私の党生活が始まるわけです。

やがて労農党本部の書記に任用され、3年半ほど経過しまして、57年2月に社会党に入りました。その前に労農党が社会党に吸収合併されるわけですが、労農党本部書記の3人ほどが社会党の本部書記局に移ることになりました。そして2～3カ月たったころ、『月刊社会党』という党の雑誌が発行されました。その雑誌は渋沢利久さんという人が1人で編集していたのですが、この人は私が行って手伝っているうちに、選挙に出馬するというので雲隠れし

てしまいまして、結局それから7年間、私が『月刊社会党』の編集責任を担うことになりました。

そのあと労働局副部長を6年間ほどやりまして、70年11月の党大会で曾我祐次という人と対抗する形で、組織局長の座を争うことになりました。当時、私は党内で知名度もなく、しかも少数派の構造改革グループに属していたので、まさか当選するとは思わなかったのですが、いろいろな事情がありまして、図らずも私が当選、いきなり労働局副部長から組織局長になりました。ところが、これを1期だけやりまして、自分で言うのはおかしいですが、全党的に評判のいい組織局長だったのに、わずか1期で、オール派閥の統一名簿に「企画担当中執への交代」が指示され、それに反発して、72年2月の党大会で単独立候補、当然ながら落選して社会党本部を離れました。

横浜市へ

社会党本部を離れて、半年ほど職安に通っていましたが、7月から横浜市役所に参与という、実質は嘱託として入ることになりました。市長の飛鳥田さんに拾ってもらったわけです。76年までは市役所の市民局で1万人市民集会や区民会議などを主として担当しました。これが私の本来業務で、詳しくは後でお話します。そのほか鳴海正泰という市長のブレーンに誘われ、市政の政治的な課題についても担当いたしました。

思い出深いのは、76年4月、市長に随行してヨーロッパの仏、伊、ユーゴの3カ国を訪ね、南欧の社会党、共産党の幹部たちと当時の政策課題や自主管理問題などで議論を交わしました。パリでは、フランス社会党のミッテラン党首のお宅に何って夫人の手料理をご馳走になったりしましたが、実はその前年の3月、都知事

3選への出馬をためらっていた美濃部さんを説得してもらうことを狙ってミッテラン氏を日本に招いているのです。そのときは海原峻という大阪市大の教授と私が接待役となり、箱根の富士屋ホテルで同宿、小田原城の見学や、新幹線はまだ珍しいというので小田原から横浜まで同乗したりしました。また、日本テレビがミッテラン出演を要望したのになかなか応じなかったけれども、仲に入って、当時フランスでは珍しかったデジタル時計や洋弓などをさしあげることで1時間番組への出演を応諾してもらったとか、そんなこともいろいろありました。

あるいは、74年4月のアジア卓球選手権大会ですね。これは非常に政治的意味合いのある大会だったのです。ちょうどベトナム戦争の末期で、南北ベトナムとかラオス、カンボジア、北朝鮮、中国といった外国代表との間でなかなか込み入った問題があったのですが、それに対応するために私は3週間ほどホテルに泊り込んで、政治的な工作に当たりました。

そんなこんなで、横浜市役所でほぼ6年間つとめ、その最後は企画調整局の都市科学研究室長になっていました。

再び社会党へ

そして、77年9月には飛鳥田さんが「金輪際出ない」と言ったのですが、12月になって成田さんの要請を受けて社会党の委員長就任を受諾したとき、補佐役の中央執行委員に私と山花貞夫代議士が指名され、いわば里帰りの形で社会党本部へ戻りました。それから5年9ヶ月、83年に飛鳥田委員長が辞めますが、そのあとも私は党本部に残りまして、政策担当中央執行委員、あるいは政策審議会の事務局長を2年ほどつとめました。土井たか子委員長のときは企画調査局長を1期だけやり、そうこうするうちに62歳になって、88年2月、党本部から退任

することになったのです。

その後、民間の会社ですが、たいへん政治好きの社長のところで、私は会社の仕事はあまりやらず、社会党の議員を集めて学習会をやったりしているうちに、90年に田辺誠さんが委員長になりました。そのときに四谷に田辺政治経済研究所という名の事務所を設けて、その専務理事ということでした。

田辺さんが1年半ぐらいで委員長を辞めたのですが、そのあとも図太く社会党改革の活動を続けまして、党所属議員の過半数を組織した「社会党改革議員連合」をつくりました。日本ではおそらく初めてだったと思いますが、93年の4月には社公民3党を含む「政権交代を考えるシンポジウム」を組織したりしました。

その翌年6月末に村山内閣ができました。その自社連立を私は国民への背信行為だといって憤慨しまして、これでもう政治はやめたということで、それから社会党との直接のかかわりは絶つことにしました。それ以前の浪人中も、私は社会党の規約改正について当時の笠原組織局長と共同作業をしたり、いろいろなことに口を出したりしていたのですが、自社連立からは、もういっさいやめたということでした。

最近、加藤宣幸さんが出しているメールマガジン・オルタなどにたまに書いたり、あるいは荒木重雄さんが主催している社会環境学会（所在は明治大学）で拙い論文を書かせてもらったりしています。

ここまで、私が何をやってきたかということについて、やや自己紹介的なことを申し上げました。自己紹介にしては長過ぎましたが、本題に入って飛鳥田さんとのことを申し上げたいと思います。

飛鳥田さんとの出会い

飛鳥田さんと私が初めて会ったのは1962年

8月、原水協第8回大会が東京で開かれたときです。これは有名な話ですが、この大会の2日目にソ連が原爆実験をやったのです。その前に原水協では、先に原爆実験をやる国は平和の敵だということを幹部会で決めていました。ところが、こともあろうに大会の最中、2日目にソ連が原爆実験をやった。それで、社会党と総評の代議員団は、これに対して抗議決議をすることになったわけです。ソ連代表はいなかったのですが、中国の代表団がいました。中国も核実験をやるつもりだったものですから、中国の代表団と日本共産党が猛烈に、「これは平和のための核実験だ」と主張しました。社会党側は、「いかなる国の核実験であろうと原水禁大会の最中に核実験をやるとはけしからん。抗議決議をすべきだ」と反論。これで折り合いがつかなくて、社会党・総評の代議員が総引き上げということになりました。

そのときの社会党の責任者が飛鳥田国民運動委員長です。その数日後、社会党の両議院議員総会で飛鳥田国民運動委員長が原水協大会の顛末を報告しました。共産党や中国代表団と、折り合いがつかなくてやむを得ず総引き上げをしたという事情を報告したのです。そうしたら、旧労農党の主席だった黒田寿男さん、この方はいわば私の親分だった方ですが、当時は確か安保体制打破同志会（のちの平和同志会）のトップでした。この黒田さんが、「飛鳥田君、いまの報告は君の本心か」と尋ね、ほかに答えようがありませんから、「私の本心です」と答える。そこで黒田さんから「そうか。それなら、君はもはや同志ではない」と宣告されてしまったのです。

その日の夕方だったと思います。飛鳥田さんが私に、「おい、船橋君、ちょっとつきあってくれ」と言うので、新橋の居酒屋へ行ったのです。その居酒屋で、あの安保5人男の1人とし

て誉れ高い社会党の花型代議士であった飛鳥田さんが、青菜に塩というか、打ちひしがれて、「船橋君、僕は間違っていないよね。だけど、人生は虚しいね。独りぼっちだね」と言うわけです。あの輝かしい花型政治家の代議士が、こんなに打ちひしがれて、人間性をむき出しにして嘆いている。私はその姿を見て、心から飛鳥田さんの人柄、純粋な人間性に惚れてしまったわけです。それが、62年8月の生涯忘れられない触れあいであり、私が飛鳥田さんのために力を尽くしたいと固く心に決めた最初のきっかけです。

飛鳥田さんは市長になってからも、色紙にしばしば「人生所詮、独りぼっち」と書くんですね。その色紙を何枚も書いて、いろいろな人に渡すわけです。もらった人は訳がわからない（笑）。

ただ、飛鳥田さん本人に言わせると、それは飛鳥田さんの奥さんのお兄さんである寺田透という詩人が漏らした言葉だと言うのですが、私はナマで、烏森のあの居酒屋で飛鳥田さんが言った「人生しょせん独りぼっち」という言葉を聞いているわけです。

それが62年の8月です。そして、63年4月に飛鳥田さんは代議士を辞めて横浜市長選挙に出馬します。その出馬に至る心情的なきっかけは、安打同を事実上除名された。しかも、自分がいちばん信頼していた黒田さんのグループから追われたということが、非常に影響したと思えます。本人は意地っ張りですから、そんなことないよと言うかもしれません。回顧録などを見てもその経緯に飛鳥田さんが触れることはなかったけれども、私は間違いなく、黒田さんとのあの一件が政治家・飛鳥田の転機だったと見えています。

社会党で最左派と言われた黒田さんは、実は

そのころ中国の影響を非常に受けておられて、中国側の言うことにはだいたい何でも賛成という傾向にあったわけです。私どもも、赤松康稔君、中原博次君、船橋の3人が社会党本部に移っていたのですが、赤松君だけは日中友好協会正統本部というところで活動して、文化大革命を熱烈に支持して毛沢東語録を振りかざしていたのです。

——民主党の赤松広隆さんのお父さんですか？

いえ、違います。赤松康稔という岡山出身の人です。この人はもともと黒田さんの秘書でした。それが毛沢東語録を振りかざして文化大革命の影響をもろに受けていたのです。私はどうしてもそれに納得できないものですから、私の親分だった方ですけども、残念ながら黒田さんとは絶縁せざるを得ない。当時の中国の路線を称賛して、文化大革命教に入信するわけにはいかんということで別れてしまったのです。

とにかく、そういうことがありまして、63年4月に飛鳥田さんは横浜市長選挙に出馬します。この選挙では、保守系が割れて半井清、田中省吾という2人の候補者が立ち、そのすき間が、社会党の飛鳥田さんには有利な条件となりました。そうでなければ、1対1なら負けていただろうと思います。当時の人口150万の横浜市で、飛鳥田さんの得票は28万票、次点との票差はわずかでした。

私はたまたま63年4月に東京の世田谷から移って横浜に居を構えたものですから、その前後から飛鳥田さんをしょっちゅう訪ねて、いろいろ話を聞きました。飛鳥田さんの考え方で、非常にユニークで面白いと思ったのは、あの人の直接民主主義論です。トクヴィルの話などをよくしてくれました。「檜の木の下での民主主義」というやつです。そんな話をして、市民一人ひとりとの直接の触れ合いを大事にする、肌を触

れ合いながら話し合うことが民主主義の基本なんだよ、ということをよく言っていました。

それを何回も聞いているうちに、なるほど、これは一つの政治理論といただけますか、そういう体系化できる話だなと思ひまして、市長選挙のときに私も「F君への手紙」というパンフレット、これは1部、2部、3部とあるのですが、その1部に「1万人市民集会の構想」という趣旨を解説して「F君への手紙」の中で書きました。

飛鳥田さんは第1回目の選挙のときに、普通なら福祉をどうするか、まちづくりをどうするか、そういう政策を訴えるはずですが、それにはあまり触れないのです。「こどもを大切に市政」とか「だれでも住みたくなる都市づくり」といったスローガンはありましたけれども、街頭に立つと「1万人集会をやります。直接民主主義でやります」。ほとんどこれしか言わない。ひどい話で、こんな演説をして、普通は票にならないはずですが、飛鳥田さんは市会議員、県会議員を短い期間ですが、ずっと続けてきていて、横浜の土地に非常になじみがある、地縁があるということもあって、しかもメチャクチャ話上手でしょう。話を聞いた市民がみんな納得してくれる。それと、もう一つは相手が2人立候補してくれた。その間隙を縫って当選することができたわけです。

飛鳥田市政の始まり

飛鳥田市政の1期目は、大変な時代でした。選挙のときに「150万市民の皆さん」と呼びかけたのを覚えています。当時、横浜の人口は1年間に10万人ずつ増えていました。これは市の行政の立場で言いますと、年間10万人も増えるために、小中学校や上下水道、ガス、交通などのインフラを整備しないとはいけません。税金はあとから入ってくるわけです。しかし、

移住してくる人のインフラはあとからというわけにいかない。入ってくるときにはちゃんと学校やガスや水道も下水道もみんな整っていないといけない。税金は翌年以降に入ってきますから、それまで好きにしてくださいというわけにはいかない。そういうことですから、行政は大変な苦勞をするわけです。

例えば、私の娘で言いますと、小学校4年生で横浜へ来て、保土ヶ谷区にある川島小学校の分校としてつくられた上菅田小学校に入りました。急ごしらえですから、体育館などはプレハブでした。その娘が6年生で卒業するときにはもう満杯になって、上菅田小学校からまた分校ができています。横浜市全体では、年間50校ずつもの小中学校が建設されるという、そんなスピードで人口が急増し、市民のニーズが増えていたわけです。

だから、飛鳥田市政の1期目に手がけた仕事は、あまりお金をかけない課題が主でした。例えば「市長に手紙を出す旬間」を設け、寄せられた1万2,700通の手紙すべてに職員を大動員して返事を出しました。市庁舎1階の広間を「市民広場」として部長級が座る立派な椅子を並べ、一般の市民がそこに座って市長や幹部たちが交代でじかに相談を受ける。

当時12区すべての区役所に区民相談室を設けて専従職員を配置する。そうした施策がつぎつぎに進められました。

子どもが生まれると「おぎゃあ植樹」をする。空き地があると地主と交渉して「ちびっこ広場」をつくる。野毛山動物園は無料にする。そんなことも1期目に始まりました。水道料金は値上げしましたが、これは大口利用者を重点にして一般家庭の負担を極力抑えました。身障者や生活保護者には無料パスとか奨学金などの手当てをしました。予防接種は全部無料化です。また、

電源開発会社と交渉して磯子の火力発電所に対する全国初めての公害防止協定を締結しました。そうした施策は、いわゆる横浜方式ということで他の多くの都市の手本となったのです。

また、64年11月には全国革新市長会を結成、飛鳥田市長がその会長に就任して、全国各地の革新市長と仲間づきあいが拡がりました。そして67年2月、経済学者の美濃部亮吉さんを口説いて東京都知事への擁立に成功しています。

こうして飛鳥田市長の1期目は、あまりお金をかけずに革新市政ならではの施策を進めました。ハードな面では、65年に鶴見の清掃工場を完成させたこと、磯子に子供たちのための「マンモスプール」を建設したことが目立つ程度です。ただし、本格的な都市づくりの構想は、「6大事業」計画として、1期目のうちから、優秀な専門家たちがブレインとなって着々と準備され、65年1月、その全体像が市民の前に明らかにされました。

「6大事業」というのは、ベイブリッジ、港北ニュータウン、都心部再開発、地下鉄建設、環状2号などの高速道路建設、金沢地先の海浜埋立などの事業です。いまそれ以外のものを探するのはちょっと難しいぐらい横浜市のハードな都市構造の骨格は飛鳥田時代の1期目から構想され、計画されています。例えば、みなとみらい地区はいま有名になっていますが、あそこはもともと三菱の造船所だったところです。それを、いちばん南の金沢区の海浜に引っ越してもらった計画にしました。それが実を結んで、桜木町駅の裏側にある造船所跡地を整地して埋め立て、いまの「みなとみらい地区」ができあがっているわけです。

こうした「6大事業」の構想、計画を立てたのは、田村明、浅田孝といったハードな都市づくりの専門家たちです。とりわけ、企画調整局

長を勤めた田村さんが直接の責任者でした。この人は、東大の経済学部、法学部法律学科、政治学科の三つを卒業された方で、飛鳥田市長が辞めた後に法政大学の教授になられたからよくご存知だと思います。この田村さんと、そして東京の都政調査会におられた浅田孝さん、このお二人が飛鳥田さんに提案したのです。そして、そのお二人の活動に道を開き、市議会対策も含めて政治と行政の仕掛けを整えるうえで、鳴海正泰さんが重要な役割を担いました。鳴海さんも元は都政調査会のメンバーでしたが、1期目の当初から飛鳥田市長に招かれて市役所に入り、市長のブレーンとして、市議会対策や他の革新都市との関係、国際関係をも担って活躍していました。ですから、浅田、田村、鳴海の三人が一つのチームとして飛鳥田市政の中核を支えていたということです。

飛鳥田さん自身の支持基盤は「市長と市民の会」として組織されましたが、これは保守系の有力者や町内会・自治会の役員、女性の活動家なども含んだ幅広い組織で、あとで申し上げる「一万人市民集会」の推進力となりました。労働組合では、いちばん大きいのが横浜交通労組でした。例えば市電を廃止してバスや地下鉄に切り替えるとき、組合との間で悶着が起きるはずですが、非常に親戚みたいに仲良くしているものですから、悶着なしにスムーズに移行できました。そのほか市の水道労組と横浜教組、この二つの組合を加えて飛鳥田「御三家」とも言われていました。

そんなことをいちいち言っていると時間がたちますから割愛しますが、要するにいまの横浜の都市構造の骨格は、飛鳥田時代1期目からほとんど計画され、準備されていたと言って間違いのないと思います。

飛鳥田市政の2期目は67年4月から始まります。この2期目の市長選挙で、飛鳥田さんは保守系候補一人を破って47万票を獲得、大差で再選を果たしました。先回りして申しますと、飛鳥田さんの得票は71年3期目の選挙で66万票、75年4期目には76万票です。こうして回を重ねるたびに人口も増えましたが、飛鳥田市政への市民の評価が年を追って上がり、安定していったわけです。

2期目は「いざなぎ景気」の最中でした。高度経済成長の波に乗って、東京に本社がある大企業が横浜方面に続々と進出、ハードな都市づくりの条件も成熟して「6大事業」を軌道に乗せやすい状態になりました。その反面、大気汚染や交通渋滞、乱開発など過密にともなう市民生活の障害が増え、深刻なニーズが高まっていました。

ですから飛鳥田市政は、1期目以上に公害対策や開発政策の改善指導に力を注ぐこととなります。公害対策では、例えば磯子の発電所や日本鋼管を相手にして、法律よりも厳しい公害防止協定を締結。根岸につくられた石油コンビナートは緑地帯で市街地と隔てることにしました。金沢の埋立地では「海の公園」の建設が始まりました。桜木町一関内間的高速道路は建設省の高架案をやめさせて半地下化することになりました。67年には政府から横浜港の原子力船母港化が求められましたが、これは断固拒否しました。そのほか都市づくりに関わる開発問題では、例えば、飛鳥田市長が東急の五島慶太さんと談判して、土地を開発して新しい住宅地をつくる時には、必ず学校用地や公園などの用地を無償もしくは非常に安い価格で提供させることにしました。68年6月、その覚書に調印するとすぐ8月には「宅地開発要綱」を定めて市内の大規模開発全体に適用する。まだ事例は沢山ありますが、とにかくそういうことを一

生懸命やりました。

71年からの3期目と75年からの4期目では、ハード面でもソフトの政策でも、1期、2期に計画された事業を本格的に着手、推進していくことになります。「6大事業」が着々と実を結んでいくわけです。

市営地下鉄は72年12月に部分開通、三菱造船の移転交渉も76年3月にまとまりました。広大な港北ニュータウンも地主との合意をえて着々と整地・建設され、高速道路の半地下化や環状幹線も計画通り進展、横浜駅東口を中心に都心の再開発やベイブリッジの建設も進んでいきます。また、71年11月には横浜市独自の公害病認定制度を発足させ、翌12月には政府に先駆けて70歳以上の老人医療の無料化を実施しています。東京では反対が強かった清掃工場の建設も、旭区に公害防除の施設と福祉施設を併用した工場を建設して以来、市民の納得を得てスムーズに進められました。こうしてハード・ソフトの両面から、飛鳥田市政の実績が積み上げられていきました。

また、当時はベトナム戦争の最中でしたが、革新市長会から反戦声明を出すと同時に、横浜市内の米軍基地撤去を積極的に進めました。とりわけ72年8月、ベトナムに向かう米軍M48戦車を村雨橋で阻止した闘いも飛鳥田市長の指導によるもので、このときは私自身も社会党の幹部として役割を担いました。

また73年10月の中東戦争勃発によって石油ショック、狂乱物価の嵐が日本を襲いましたが、横浜市では市民生活防衛の対策本部を設け、関東各県や中国の農産物、ソ連の油などを緊急輸入、生活保護世帯に配布したり市内5つのデパートで安売り販売をしました。

ほかにも報告すべき事例はありますが、この辺で話題を転じましょう。

一万人市民集会と区民会議

話が前後しますが、飛鳥田市長の念願であり、私が主に担当した市民集会について申し上げます。いわゆる「一万人市民集会」は、1期目から市議会に対して毎年1回、3度提案し、そのつど否決されました。2期目になっても、67年5月に4度目の提案が否決されました。「この提案は議会制民主主義を否定するものだ」というのが否決の理由でした。毎年提案して毎年否決される。そこでやむを得ず、「一万人市民集会」を待望する市民自身の手で、67年の10月に開催することになったのです。しかし、実際に開催するときは飛鳥田さんの最初の構想どおりにはなりません。最初は、世論調査と同じ方式で市民をランダム抽出で1万人を選んで開催するという構想だったのですが、実際はそうはいかなかった。つまり、市議会が否決したわけですから市のお金ではやれない。したがって、「市長と市民の会」を中心にしてやらざるを得なくなったのです。

そのとき、私はこの集会の企画運営の実務を担当することになりました。私の提案が全部採用されまして、67年の10月と70年の6月、2回開催して2回ともうまくいきました。67年のとき、来賓の長洲一二さんが、「これが民主主義の目に見える姿ですよ」とスピーチしてくれたことを覚えています。

この集会は6,000人余り入る文化体育館が溢れるほど、満員の市民が集まってたいへん盛況でした。ただ、これはある意味で厳しく言うと虚構なんです。会場の真ん中に座った市長がスポットライトを浴びて、いつもの調子で市民に話しかける。それはそれでいいのですが、半面そんな集会で10人、20人の発言者の声を聞いても、それは市民の声を聞いたことにはなりません。直接民主主義の理念を実際に活かすた

めには、もっと別の方法を考えなければと、私も飛鳥田さんも同じ感想を抱きました。そこで新たに区民会議の計画を進めることになったのです。

当時の横浜市は14区になっていました。いまの区はさらに増えていますが、そのすべての区で200~300人規模の出入り自由の区民会議というものをつくりました。多くても一会場300人ぐらいの規模です。その集会では、発言時間を1人3分以内ということにして、2分たったらチンと鳴らして、3分たったらチンチンと鳴らす。そういうルールにして、区民会議をいたるところで繰り返してやりました。私は全部の会場で司会をやらせてもらったものですから、あとで計算してみますと累計で2,000人ほどの意見を聞いたこととなります。もちろん意見・要望だけでなく市民同士の熱い議論も交わされました。その際、ふつうの市民は3分間の制限時間をきちんと守ってくれます。守らずに演説をやろうとするのは、たいてい市議員や労組の幹部でした。

とにかく2,000人の意見を聞いてよくわかったことは、市民の意見というのはほとんどがエゴから発しているんですね。例えば、学校を建ててくれという要望が出る。そうすると、学校ができるとうるさくてしょうがない。騒音反対だという声が出る。道路補修をどこから先にやるかで意見が分かれる。刑務所が近くにあるからどけてくれという声が出る。そういう類いの声ばかりです。私はそれを聞いているうちに、待てよ、これはエゴだからといって否定していいのか。エゴというものがあるから運動がある。政策もできるのではないか。むしろエゴとエゴがぶつかり合って、より高い次元の要求になり、それに応える政策の基礎になっていく。そういう仕掛けにしたらどうだろうと考えるようにな

りました。

例えば、旭区というところで実際にあった話です。お医者さんと患者さんの喧嘩が始まりまして、見ていると、患者さんのほうが、「医者はいらぬ金を取って3分間しか診てくれない。3時間待たせて3分診療だ」ということで医者を批判すると、医者の方は、「医者になるためにどれだけ金を使って、どれだけ勉強したと思っているのか。この医者の苦勞がわかって言っているのか」というやり取りになるわけです。そこで割って入って、「まあまあ、そんなことを言い合ってもしょうがないから、ひとつこの医療問題を考える持続的な会議をつくってみたらどうだろう」と言う人がいて、そういうふうには結論が導かれる。つまり、エゴとエゴが格闘していき、それが止揚されてより高い次元の要求になり、行政が受け止め、それに基づいた政策が作られていくというプロセスが確認できるわけですね。だから、その際に行政の指導性が非常に問われるということを私は総括の文書にまとめ上げて、それが市の方針となって区民会議を展開していったということでした。

国際的な活動

次は国際活動です。民際外交ということで、飛鳥田市長はよく外国に行きました。最初に行ったのはドイツで、これもまた実利が絡むのですが、いろいろ市の行政をやるのにお金がない。日本国内で市民債とか政府から交付金を増やしてもらおうということではたかが知れているから、外債を利用したらどうだろうということですが。当時はまだ円が今日のような状態ではありませんから、ドイツのマルクを借りたら日本で政府から借金をするよりも割がいいということで、ドイツへ行って1カ月ぐらい滞在してマルクを借り、それを円に替えて市の行政の財源に充てるということをやったことがあります。

そのついでにいろいろなヨーロッパの社会民主主義政党の幹部、党首と仲良くなっていくわけです。これは飛鳥田さんの特技ですが、すぐ仲良くなって親交を結んでいく。だから、金を作るのが目的でヨーロッパへ行って、政治的に親交を結んでくるということをやっていました。私も一度だけくっついて行ってびっくりしたのですが、とにかく相手がミッテラン（元フランス大統領）であろうとパルメ（元スウェーデン大統領）であろうと、とにかく昔からの知り合いみたいな感じで親しくなる。そして、中国の上海やアメリカのサクラメント、ニュージーランド、オーストラリア、いろいろなところに行つて姉妹都市協定を結ぶわけです。中国は、姉妹都市はいやだということで、上海との間は友好都市ということにしましたけれども、そういう関係をずっと結んだ。

極めつけが74年に横浜でやったアジア卓球選手権大会です。ちょうどベトナム戦争の末期ですが、南ベトナムやカンボジア、北朝鮮などが未承認国でした。そのため法務省が選手団に対して入国許可を出さないわけです。それを談判して、カンボジアだけは国名問題で向こうのほうがかじれて入つてこられなかったけれども、北朝鮮も南ベトナムも北ベトナムもラオスもみんな入国しました。そのとき私は3週間ほどホテルに泊り込んで世話役をやり、おかげで体重が5キロも太って困ったものでした（笑）。政治的に微妙な関係があつて、マスコミがいろいろなことを嗅ぎつけに来るのですが、それを門前払いしたり、適当にあしらうことも私の役割でした。

これはちょっと余談になりますが、三すくみの関係がありまして、中国は北ベトナムに対して親分みたいな顔をするわけです。上から目線で面倒をみてやろうというような顔ですね。ところが、北ベトナムは南ベトナムに対して威張

り散らすわけです。例えばバスに乗っていて、北ベトナムの選手団が来ると、南ベトナムの選手団はいつ降ると北ベトナムを先に乗せる。そういう関係でした。そして、南ベトナムはラオスに対して強いのです。ところがそのラオスは、ソ連が後ろ楯にいるものですから、中国に対しては強いのです。こういう三すくみの関係は面白いなと思ひました（笑）。

とにかくこれは、アジアの未承認国に対して、開かれた関係をつくるのに先鞭をつけたという意味で国際的にも評価された催しでした。

革新市長会

もう一つは、「ゴッドファーザー」の話です。これは75年の春に長洲一二さんを神奈川の県知事に担ぎ出そうということで、私も飛鳥田市長に言われて一役買わせていただきました。いわば長洲知事の生みの親が飛鳥田さんでした。それに東京の美濃部さんも飛鳥田さんの口説きが決め手になって出馬を決意したのです。長洲さんも美濃部さんも、生みの親は飛鳥田さんでした。そして、そんな経緯から長洲さんが「ゴッドファーザー」というニックネームをつけたわけです。

全国革新市長会もそうです。これも飛鳥田さんが生みの親で、70年代に大きく育ち、ピークのときには136の都市に革新市長が誕生しました。どんどん革新市長が増えるものですから、その勢いで中央に攻め上ろうと言って、飛鳥田さんがいわゆる中央包囲論を唱えていましたね。そして、ちょうどその頃、73年の8月に摂津訴訟の問題が生じました。超過負担問題で大阪の摂津市の市長さんが裁判に訴えたわけです。これは学校の建設費や保育費、その他の福祉に関わる費用に対して、国から補助金があるけれども、市が持ち出す金はそれよりもはるかに多い。法的な基準を超えて負担せざるを得な

いのです。本来これは国がもっと補助すべきだ。市役所は超過負担を余儀なくされているということで裁判を起こした。飛鳥田さんはそれを応援しようと言って革新市長会の市長に号令をかけて、全国各地から50人の市長が集まりました。その50人が自治省の廊下を埋めて座り込みをやったわけです。市長の座り込みですから自治省も大変でした。

こうして東京都知事も神奈川県知事も飛鳥田さんが生みの親になり、全国革新市長会でも采配を振るった。私は、まさに「ゴッドファーザー」と言うにふさわしい飛鳥田さんの働きだったと思います。それに味をしめたものだから、これは委員長時代のことになるのですが、東京都知事に都留重人さんの出馬を求めて口説いたわけです。異常な執念を燃やして口説いたのですが、結局この口説きはうまくいきませんでした。「ゴッドファーザー」の効き目は、社会党の委員長になると途端に薄れてしまったわけです。

沖縄と連帯して

横浜にアメリカの総領事館がありまして、その総領事と飛鳥田夫妻は家族ぐるみで仲良くつきあっていたのですが、アメリカの政策に対しては、飛鳥田市長はほとんど反対でした。基地撤去をどんどん進めて、いまは横浜市内に基地らしい基地は残っていません。先ほど申し上げたように、ベトナム戦争末期に鶴見区村雨橋というところで、戦場に向かうM-48というでっかい戦車4台を止めました。ここにおられる浜谷さんもそうですが、43人の社会党員が戦車の前に座って止めたということがありました。この闘いも飛鳥田市長の指導によるのですが、この話は詳しく言えば長いので割愛いたします。

そのほかに鶴見区安善というところに米空軍のジェット燃料の基地があります。あまり知られていないのですが、実は沖縄で基地の中に入

って基地内の弾薬庫を調べたい。核弾頭が置いてあるのではないかと、調べたいと沖縄の住民の方が要求して、とんでもない、一步も基地に入れないと撥ねつけられたことがあるのです。

そのニュースを聞いた途端に飛鳥田さんが、沖縄を助けるために横浜でやってやろうじゃないかと言って、私も参加させてもらいましたけれども、安善のジェット燃料基地に市役所として立ち入り検査をしました。まずやったことは何かというと、鶴見区の町内会長に、あんな危ないものが置いてある、市の消防局が調べる必要がある。あれが爆発したら鶴見一帯の町は一瞬にして燃え上がってしまう。危なくてしょうがない。だから、あれは検査する必要がある。そう言って、区内の町内会長の同意を取り付けておいて、飛鳥田さんが横浜基地の司令官のところまで行って交渉して、「おまえさんが認めなかったら、おれはワシントンへ行って交渉してくる」と言って頑張ると、結局、立入検査が認められた。

つまり、沖縄の運動を助ける目的で横浜・安善の貯油施設の立入検査をやった。横浜が認めさせたのだから、沖縄でもやりなさいという先例をつくるのが狙いでした。私も行ったのですが、たいしたことはないの、油のタンクをカンカンと叩いてそれで終わりなんです（笑）。それでも、立入検査をしたという事実が重要だったわけです。とりとめのないことを言いましたが、戦車を止めてみたり、基地の中へ立入検査をやったり、飛鳥田さんの反戦平和の強い意思が、具体的な実践面でよく表れていたと思います。

横浜市の行政の仕組みと飛鳥田さんの人となり

市の行政の仕組みについて申しますと、首脳部会議というものがあって、これに市長、助役3人、財政局長と先ほど言った田村企画調

整局長、それから鳴海専任主幹が常連でした。私も時たま呼ばれて何度か陪席したことがあります。飛鳥田市長の特徴は、具体的な案件で「それはだれがやっているの？」と聞くので、「何々局でやっています。局長を呼びましょうか？」と言うと、「いや、実際にやっているのはだれなんだ？」「それは何々課の何々係長です」「じゃあ、その係長を呼びなさい」ということで首脳部会議に係長を呼ぶのです。これは市役所では前代未聞のことです。現場の人の話を大事にする。私も、ぼやっと傍聴していると、「船橋君、これ、どう思う？」といきなり声をかけられて、うろたえてしまうことが幾度もありました。そういう生き生きした運営、あまり職階ということにこだわらずにやる。それが飛鳥田市長の一つの特徴でした。

飛鳥田さんは権威が嫌いによく言われます。その言葉が適当かどうか分かりませんが、例えば、金日成との会談。これは北朝鮮に行ったときに痛感したのですが、金日成は昔の天皇以上ですね。向こうの幹部が口をきくときには、直立不動になって、「はっ」とみんな畏まるわけです。そういう神様扱いの人の隣で、飛鳥田さんは、着座するといきなり「あんたもしばらく会わないうちにずいぶん白髪が増えましたね」と平気で言う。私の隣に金永南という形式上は国家の最高幹部の人で、いまでもまだ生きていますが、その人の顔を見たらしかめっ面をしている。飛鳥田さんは平気なんです。

これは、私の本に書きましたが、朝鮮で一番傑作だったのは、マンギョンデという金日成が生まれた家があるんです。その家で、なかなか美人の女子大生みたいな人が、すごく丁寧に、「この壺が曲がっていますけれども、曲がった壺も真っ直ぐの壺も入る水は同じだと主席様のお母様がおっしゃいました」と、くだらない話を延々とやるわけです（笑）。飛鳥田さんはそ

ういうのは大嫌いなんです。話をさえぎって「ちょっと質問していいですか」「はい、なんでもございましょう？」「あなたは結婚なさっているの。それともまだ？」と聞くんです。すると、顔を真っ赤にして「はい、私は独身でございます」。それから今度は後ろに山がありまして、これは金日成主席のお父様が、いや、お祖父様が大砲でどうやった、こうやったと1時間ぐらいたるわけです。

そのあと、下りてきて、迎えの車がずらっと並んでいる。その施設の前にマンギョンデの職員が一同整列しています。そして、「本日は敬愛する金日成主席のために生家をご訪問いただきまして職員一同感激しております。つきましては本日のご感想を委員長先生から一言うかがい、我々はそれを心に刻んでいきたいと存じます」と丁寧にやるわけです。飛鳥田さんは車に片足をかけて乗りかかって、フーッと見渡した一番末席にさっきの女性がいる。パッと指さして、「あんたね、今度来るときまでにはいいお嬢さんを見つけていなさいよ」と言うんです。そしてそのまま車に乗ってしまう。私が最後に車に乗るのに、職員たちの顔を見たらみんな呆然としている。権威というものが肌に合わないというか、ほんとに嫌いなんです。ところが金日成主席のまわりにそんな人がいないせいか、逆に主席が飛鳥田さんに惚れこんで親密になっていました。

パリでは、ミッテランの自宅まで行って、それも家族ぐるみで奥さんとともに仲良くなる。写真を撮る話になると、「そこに積んである本の上から撮るとちょうどいいよな、いいでしょう？」とミッテラン党首に言う、そういう調子なんです。

あるとき飛鳥田さんと一緒に市役所に朝早く行くと、一番先に会うのは掃除のおばさんなんです。「ああ、おはよう」と声をかけて、「何と

かちゃん、元気？」とその人の息子の名前を言うんです。飛鳥田さんにとってみれば、掃除のおばさんも金日成もミッテランも同じ人間じゃないか。そういう感覚だったんですね。これはあの人の一番ユニークな点だったと思います。

社会党委員長時代の飛鳥田さん

そんな話をしているとキリがありませんから、社会党委員長時代のことを少し申し上げておきたいと思います。まず「100万人の党建設」。これは実は『朝日ジャーナル』でこの趣旨を発表してから委員長になったのですが、100万人の党づくりを飛鳥田さんが提起したことの意味を社会党ではほとんど理解してもらえなかったということです。

ヨーロッパでは100万人の党というのは常識ですね。イタリア共産党で当時200万ぐらいですか。イタリア社会党でも党員は100万人ぐらいです。人口は日本より少ないのにです。ヨーロッパでは100万党が当たり前なのに、日本では社会党なんか市民社会から離れた特別なところだということで、当時の党員は全国でわずか数万人でした。

イタリアで私どもが痛感したのはチルコロ、これは片桐薫さんから説明を受けて実感したのですが、普通の喫茶店と居酒屋の中間ぐらいの施設があって、そこでワイワイガヤガヤ、ギターを弾いたり歌を歌ったり、その脇のテーブルでは大きな声で議論をしている。聞いてみると、ここは社会党のチルコロです。共産党チルコロは別にありますという。つまり、市民の日常生活の中に党生活の場があるわけです。

私はこれを一言で、「政治の生活化」というキーワードを考えたのですが、そういうものとして100万党ということを考えていた。そのためには技術的には党員カードを売ってもいいじゃないか。期限付きの1年間有効の党員カードを

街頭販売してもいいじゃないか。そういう技術的なこともあるけれども、もっと大事なことは、ボランティア原則を党で取り入れたらどうか。つまり、党活動というものは党員が中央党機関の指示・決定に従ってやるものだという建前をひっくり返して、党機関は党員の意識を鼓舞するような情報と活動課題のメニューを提示する。それを党機関の義務とすべきであって、党員は選択的・自主的に、やりたいこと、やれることをやる権利を持つ。そういうふうに党活動における権利と義務の関係を逆転させたらどうか。いわば、指令主義からボランティア原則への転換ですね。100万人の党づくりのためには、まずそのことが前提になると考えたわけです。

後に私が党本部をやめたあと、笠原組織局長の要請で党規約の抜本改定、この作業を四谷の旅館に二人が泊りこんでやりましたが、そのときに私の提案で党の組織原則を共産党と同じ「民主集中制」から「合意に基づく統合」に改め、100万党の文脈に沿った権利・義務関係の逆転などを打出し、大会決定となりましたが、時機を逸し、全党的に理解不十分、未消化のままになったことを残念に思っています。

もう一つ言いますと、伝統的に社会党の活動は非常事態対応型でした。何か特別な事件が起きるとワーッとやるけれども、火の手が収まると沈んでしまって平穩無事になってしまう。そんな非常事態対応型ではなくて、イタリアのチルコロのように日常生活の中に党がある。そういうふうに党をつくり替えようではないか。党の組織なり活動の規範と言いますか根本のあり方を変えようというのが、実は100万党を提起したときの飛鳥田さんや私どもの趣旨だったわけです。ところが、当時の社会党ではそれを理解してもらえない。理解した人でも、それは無理だよと言って横を向く。だから、結局は従来どおりの大量入党運動を超えられないわけで

す。入党条件の緩和、党費を安くするというような組織技術レベルの問題にされてしまう。それはやらないよりはいいでしょうけれども、組織技術の問題にされて、党体質の基本的な転換、つまり政治の生活化、党の生活化ということ、その目的には接近できなかつた。なぜできなかつたのでしょうか。

市役所でやったときは、1万人集会にせよ、区民会議にせよ、全部成功しました。最初のランダム抽出で、という構想はうまくいかなかったけれども、市民参加の実績はかなり築くことができました。しかし、社会党ではほとんど何もできなかつた。一体なぜだろうということを実は委員長を辞めてから『中央公論』（83年10月号）に、委員長と相談して飛鳥田論文として私が書きました。要するに、市の行政では「天の声」という言葉がありますが、それほどではないにしても、トップの意思を首脳会議なり幹部会議で決定すれば、市の職員が無条件に従うのは当たり前なのです。これは会社の場合と同じです。ところが社会党ではそうはいかないのです。まず合意の形成が求められる。いろいろな派閥間の合意形成、中央と地方の合意形成、そのために大汗をかくのが幹部の仕事なのです。

横浜市と社会党との違い

だから、委員長出馬を受諾するとき、党改革のために委員長の権限強化を求めました。私が起案して、例えば組織局長、総務局長、国対委員長、財務委員長などを委員長指名制にしてほしいという文書をつくりました。いまの自民党総裁みたいなものです。そういう形にしてもらいたいと書いたのですが、飛鳥田さんが、「そこまで言わなくてもいいよ。それは文書ではまずいから口で言えばすむことだよ」と言うので、私は飛鳥田さんが受諾したときに成田さんを追

いかけていって、こういう要求もあるんですよと言ったのですが、「それは、君、無理だよ。針の穴にラクダを通すようなものだよ」と言われました。委員長公選の実現自体も無理だという話でした。結局、そういう違いが、党と行政の場合は根本にあるわけです。だから、変なたとえですが、湖の魚が海に出たようなもので、あるいは海の魚が湖に入ったようなもので、とにかく根本が違うわけです。

もう一つ、言葉からして違う。飛鳥田さんは労働者の集会で演説をするときに、市民と話をする調子で、例えば「最近牛乳の値段が上がって困ったものですね」というところから始める。それを聞いていた組合の幹部があとで私のところに来て「なんだ、あの演説は」と文句を言われる。大上段に振りかぶって袴を着て、タテマエで演説する。そういう演説でないと労働者は燃えないというわけです。飛鳥田さんにしてみれば、労働者個々人、その家庭、その家族がいま一番身に染みて感じていることは何か。例えば、牛肉の値段が上がって困るとか、野菜が高いとか、そういう生活実感をとらえて話をしたい。そういうことが許されない特別な世界が社会党で、ある意味、労働組合もそういう環境でした。そういうまったく環境が違うところへ来てしまったなという感じがありました。

3つの失敗

あとは失敗の話ですが、まず第1の失敗、これは先ほど申し上げた都知事選挙です。先ほど申し上げたように美濃部さん、あるいは長洲さん、どちらも経済学者です。これを口説いて知事に立候補させてうまくいった。その経験があるものですから、東京都知事も学者でいこう。できるだけ生活に密着した経済学者がいいというので、都留重人さんにこだわった。ちょっとこだわり過ぎたわけです。

ところが、総評の組合のほうで太田薫さんがどうしてもやりたい。前の年からそう言っている。それを飛鳥田さんは頑として受け入れないわけです。何としても都留さんをということで、都留さんを口説きに私もくっついて行きました。乃木坂の乃木神社の裏の都留さんのお宅に何回通ったことか。しかし、どうしても「うん」と言ってもらえない。とうとうしまいには、三多摩の後藤喜八郎さんが「飛鳥田親分を助けるために私が出ましようか」と言って、ホテルニューオークラで飛鳥田さんと私どもが弱った、弱ったと言っているときに来てくれました。東京都本部も、後藤喜八郎でやろうかと推薦してくれたけれども、組合が絶対反対。とうとう刀折れ、矢尽きて、太田さんを推さざるを得なくなった。だけど知事選挙の結果は予想通り惨敗でした。

以来、革新都政の火は消えたわけです。今日に至るまで消えっぱなしです。はじめから太田さんに乗っていればよかったのと言う人もいますけれども、飛鳥田さんとしては自分の経験から、都民の知事、都民の代表でなくてはならない。組合の代表では無理だという信念がつかずいてしまった。組合の圧力の下にどうしようもなくなった。これが第1の失敗です。

2番目の失敗は、書記長問題。多賀谷真稔書記長の次の人選の問題です。多賀谷さんが総選挙で落選して、バッジを付けない状態で1年8カ月も書記長をやってくれました。しかし、いつまでもそういうわけにいかないの、馬場昇さんを委員長が指名した。なぜ指名したかという、これは本当に申し訳ないのですが、私の責任なんです。

当時、馬場さんは派閥反対を唱え、党内民主主義の確立を訴えて署名運動をやり、61名の国会議員から署名を集めていました。私はそれを見ていて、なかなか反骨精神のある人だと思

っていました。じつは、その前の委員長公選のときに反飛鳥田の勢力が生まれていました。政構研とかいろいろところで飛鳥田批判が強まっていたのですが、公選をやってみると、68%の支持を得て飛鳥田さんが当選した。2選目は無投票。3選目で全党员投票の結果、7割近い支持票を得た。だから、飛鳥田さんなら何でもできる、思うようにやれると、私どもが過信したわけです。

そして、そんなにこだわったわけではないのですが、人選で悩んでいる飛鳥田さんに「馬場さんもなかなか面白いですね」と一言、申し上げたら、飛鳥田さんが乗ってきちゃったわけです。「それはいいな。ただし、おれが決めるまでは絶対に口外するなよ」と言うから、えっ、本気で考えているの？と驚きました。あんまりこの人しかないという思いで言ったわけではないのですが、大会になって、なかなか人事が決まらずガタガタもめて窮余の状態になったときに、飛鳥田さんが馬場昇の名前を口に出して、馬場書記長の立候補が決まったわけです。途端に党内は大騒ぎになりました。「あんなやつが書記長になるなら、おれたちは総引き上げだ」と、政構研系の幹部が全部引き上げてしまった。いわゆる片肺執行部という形になった。党の運営に深刻な影響をもたらす事態になったわけです。

結局、当時は副委員長だった石橋政嗣さんに斡旋をお願いして、調整の結果、馬場さんに降りてもらったのですが、この馬場さんという人は、あまり人のことは言いたくないけれども、実はちょっとひどい人でした。

私どもは横浜に長くいたので党内情勢はあまりわからないものですから、外目でなかなか反骨精神があるな。しかも、訴えていることも筋が通っていると思っていたのですが、飛鳥田さんが、「党のためにこの際身を引いてください」と丁寧と言ったけれども、「私をクビにするな

ら、あんたが先に辞めなさいよ」という口のきき方をする人でした。それにはちょっとびっくりしました。同時に、最初に軽はずみな口をきいた私自身の責任の大きさを思っ身縮む思いがいたしました。これが二つ目の失敗です。

もう一つの失敗は飛鳥田さん自身の選挙です。飛鳥田さんは東京1区から立候補しましたが、これは本人の意思ではなかったのです。選対の幹部から言われたのは、東京1区ということは昼間人口が極めて多くて、全国から人が来るところだ。だから、東京1区で選挙運動をやれば、関東一円はおろか全国に影響が広がる。だから、党首たるもの東京1区で出るべきだ、ということでした。この理屈で押しまくられて、否応なしに、じゃあ、しょうがないな。横浜とか横浜に近いところで立候補したらどうかという意見も出ていたし、横浜では選挙区を準備しておかないといけないという声があったわけですが、そうではなくて東京1区から立候補することになりました。

立候補してみても分かったことは、東京1区の有権者の7～8割は次の選挙でいなくなるのです。流動が非常に激しい。しかも、新しく入って来る人も選挙には関心がなく、ほとんど投票をしない人なのです。だれを頼りに選挙運動をやるのかというと、商店主、大家さん、地主さん、小さな工場や商店のおやじさん、定着しているのはそういう人が大部分なわけです。だから結局、戸別訪問をやらざるを得ない。1軒1軒回って、支持してくれるお家から紹介してもらって、また新しい家を訪ねて行く。飛鳥田さんは足が悪いものですから、杖をつきながら1軒1軒回って歩く。これは本当に涙が出るほど私どもは辛い思いをしました。あの選挙区を決めるときに反対して、横浜で出てもらうべきだった。本当に私どもの責任だと痛感いたしました。これが三つ目というか、一番最初に申し上げ

るべき大きな失敗です。

飛鳥田さんは83年9月、社会党委員長をおやめになり、横浜で弁護士を開業、厚木基地騒音訴訟団長などの活動を続けられました。

飛鳥田さんの「生活の知恵」

飛鳥田さんと私の関係でもう一つ申し上げます。労農党時代の末期のころ、1956年12月にイタリア共産党のトリアッティ書記長が「イタリアにおける社会主義への新しい道」という論文を発表しました。その前にソ連共産党の20回大会でスターリン批判があつて、「多中心体制」を唱えていた人ですが、そのトリアッティ書記長が「新しい道」の論文の中で、かの有名な「構造的改良の路線」という命題をうち出しました。

私自身、労農党時代に命じられて、党の新しい綱領を起草したりしましたが、その当時は東西冷戦の影響が日本の理論戦線にも影響して、西のアメリカ帝国主義に対する東の平和勢力という発想にとらわれていました。だから、日本における体制変革の課題は、共産党が民族解放民主革命、労農党は独立民主革命と、似かよった戦略路線を取っていたのです。けれども、私は先輩と議論をするうちに、やはり左派社会党が主張したとおり、日本の支配階級は自分の利益のためにアメリカと提携し、自ら国家権力を握っている。その意味では国家権力をアメリカ帝国主義が支配していると考えるのは間違いではないかと思うようになり、そのころからイタリアの労働プラン闘争とか世界労連のヴィットリオ報告とともにトリアッティ論文を学んで、構造的改良の路線を支持するようになりました。

労農党末期からすでに私どもはそうでしたが、社会党へ来て加藤宣幸、森永永悦、貴島正道という人たちと一緒に、構造的改良、これを構造改革と言い換えた勉強会をやりました。高

沢寅男とか広沢賢一という佐々木派の人たちも一緒に勉強会だったのですが、総評や向坂逸郎さんから批判が出て、特に総評の批判が佐々木派の人たちに強く応えたように思いますが、佐々木派の人たちが抜けて、私どもが構造改革派として残りました。

飛鳥田さんはそのことをよく知っているわけです。社会党員や労組の人たちを前にいろいろな話をする。その中で時おり政治路線の話をする。横で聞いていると、まさにこれは構造改革ではないかと思われる話をするわけです。ところが最後に私の顔を振り向いて、「まあ、そういうことだけど、なあ、船橋君、これは構造改革とは違うよね」と、一言を加えるわけです。私は、それは飛鳥田さんの「生活の知恵」だと思っていました。飛鳥田さんが、「おれは構改派ではない。おれは左派だよ」というレッテルを自分の額に張っておけば、何をやっても左から批判が来ない。右からももちろん来ないわけですから、安全弁になるわけです。私の顔を見て、わざとらしく念押しする。そのことを、特に党員や組合の活動家の学習会などで話をするときに必ずやるわけです。なんだ、また生活の知恵で、安全弁を使っているな、と私は苦笑していました。

鳴海さんはふざけて、飛鳥田市長に面と向かって「オールド・ボルショヴィキ」と言っていましたし、「ウェーバーがマルクスのマントを着て歩いている」とか、よくひやかしていました。そして、飛鳥田さんは私どもとお茶を飲んだりするときには、「僕は、やっぱり左派で死にたいよ」と言っていましたから、心情としては左派と言われたいという思いが非常にあったと思います。しかし、飛鳥田さんの実際の業績に私は感嘆し、同調していましたし、なぜ飛鳥田さんは構造改革を嫌うのだろう。構造改革が嫌いなのではなくて、構造改革派と言われることがイヤだったのでしょね。そういう思想性

と言うべきかどうかわかりませんが、そんな方であったことを申し上げておきたいと思います。

飛鳥田さんは83年9月、社会党委員長をおやめになり、横浜で弁護士を開業、厚木基地騒音訴訟団長などの活動を続けられました。しかし数年後から体調を崩され、1990年10月11日、この世を去られました。とりわけ委員長時代の苦労がこたえたのだと思います。病気は腎不全で、最初は横浜市立の港湾病院、つぎに共済会病院、最後は鎌倉の民間病院と転院を重ね、親族だけの臨終の場に私も立ち合わせていただきました。ご臨終は寂しかったけれども、久保山葬儀場で行なわれた密葬には会場から道路まで溢れる2,000人も市民が弔問におとずれ、ご遺族の意向で私が無宗教式葬儀の司会をつとめました。それからすでに21年になります。

私どもは毎年1回「飛鳥田先生を偲ぶ会」を催してきました。その集いには、委員長担当だった元書記局長、市長時代、委員長時代の元秘書、特に親しかった労組の幹部や議員、それに警視庁の元SPの方も出席されます。この警視庁のSPの方がすでに20回、1回だけ今日のように台風で取りやめたことがあるので、去年で20回、毎回かならず警視庁のSPの方も偲ぶ会に出てきてくださるのです。最初は3人、お1人は亡くなりましたが、上野宏一さんという東京の滝野川で署長になられた方は、定年後も毎年欠かさず来てくれました。いまは剣道の先生だそうです。長谷川崇之君という委員長付きの書記局長だった人が飛鳥田さんことを称して「人間的な、あまりにも人間的な」という言葉を残しました。彼はいま北京に行っています。この言葉に非常によく飛鳥田さんのお人柄が出ていると、私は思っています。まさに人間的な、あまりにも人間的な方でございました。以上で一応締めくくりに致します。(つづく)